

講義名	基礎知識（歴史）			授業形態	
担当教員	辻 美代 / 小野 達哉 / 藤原 喜美子		開講期・曜日・時限	後期集中 日曜日 その他	
	単位数	2	履修開始年次	1年生	ナンバリング・コード

**主題と概要**

20世紀は、それまでの歴史とは比較にならない2つの世界大戦を始めとする幾多の戦争があった。21世紀に入った現在もそのような時代を引きずっているようである。そして、こういえるのは、20世紀以前の歴史を学び知っているからである。そもそも歴史を学び知るといことは、未来の動向も採り得るように、我々の生きている現在の社会・経済・政治・文化等の動向をできるだけ的確に知るためである。

この講義では、古代から現代までの歴史（日本史・アジア史・西洋史）を、それぞれの地域のそれぞれの時代の特性が分かるように概観する。  
また、この講義は、「教養基礎」としての性格により、高校で学んだ日本史・世界史から「教養一般」の日本史・アジア史・西洋史・現代世界史の各講義への橋渡しの役割を持つものである。

**到達目標**

学生が、歴史に関する基礎が復習でき、就職試験のための知識を身につけることができるようになる。

**提出課題**

各回の講義で学んだ内容は、テストまたはレポートとして提出してもらう。

**課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法**

講義の後に書いてもらう感想文やレポートの内容は、提出後に次の回の講義などで紹介する。

**評価の基準**

成績は、自時間に行うテストまたはレポートを集計し、100点満点で評価する。  
評価の配分は、アジア史30点（注）、西洋史30点（小野）、日本史40点（藤原）とする。  
評価の方法は、教員によって異なるため、各日の1回目（1時限）に説明する。

**履修にあたっての注意・助言他**

1. この講義は、後期の集中講義の期間に教室で実施する。  
2. 支那を支持して講義に出るのではなく、その都度の講義の内容をしっかりと聞き、その場で理解し、その都度の講義の内容は、いつ試験があっても出来るようにきちんと覚えるように復習する。なお、それぞれの基礎となる事項は、プリントとして手渡すので、講義で触れないことでも、プリントに書かれていることは講義の内容として試験の対象となる事を忘れないこと。

**教科書**

.使用しない。

**参考図書**

.なし。

**その他**

<プリント資料>  
プリント資料を配布する。  
<参考文献>  
必要に応じて講義の展開の過程で提示する。高校の世界史・日本史の教科書は、重要な参考文献となる。

**授業計画**

1. アジアの古代（注）
2. アジアの中世（注）
3. アジアの近代（注）
4. アジアの現代（注）
5. アジアの現代（注）
6. 古代ヨーロッパ（小野）
7. 中世ヨーロッパ（小野）
8. 近代ヨーロッパ（小野）
9. 現代ヨーロッパ（小野）
10. 現代ヨーロッパ（小野）
11. 日本における古代（藤原）
12. 日本における中世（藤原）
13. 日本における近世（藤原）
14. 日本における近代（藤原）
15. 日本における現代（藤原）

**授業形態（アクティブ・ラーニング）**

ア：PBL（課題解決型学習）	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
ウ：ディスカッション、ディベート	エ：グループワーク
オ：プレゼンテーション	カ：実習、フィールドワーク
キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

**準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間**

この講義は、3名の教員によってオムニバス方式で実施する。予習と復習については、講義時に各教員から指示がある。  
全体としては、予習として、高校の世界史や日本史の教科書など、各自が興味のある分野から読み始めてもらいたい。講義中、詳細を話すことができない範囲もあるので、講義の後も復習として配布資料の内容をしっかりと読み、分からない言葉があれば辞書などで調べてもらいたい（予習：約2時間、復習：約2時間）。

**卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連**

この授業は、全学共通科目の教養科目として、上記の主題と概要、到達目標の修得を通じて、本学のディプロマ・ポリシーのうち、特に次のような人材を育成することに貢献できる。  
(2) 知識を知能に転換することができる。論理的思考力を持った人材  
・課題発見・課題解決に必要な情報を見定め、適切な手段を用いて収集・調査・整理することができる(情報収集力)  
・収集した個々の情報を多角的に分析し、現状を正確に把握することができる(情報分析力)  
・現象や事実のなかに隠れている問題点やその要因を発見し、解決すべき課題を設定することができる(課題発見力)  
・さまざまな条件・制約を考慮して、解決策を吟味・選択し、課題の解決に向けた道筋や段取りを明らかにした上で、具体化することができる(構想力)

**双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述**

この講義は、プリントや板書を用いた講義の形式で進める。また、受講生からの質問があれば、講義中にその都度、話を聞き、質問に対して答える。

**実務経験の有無及び活用**

実務経験あり。歴史の分野に関わる現地調査や文化財保護業務の実務経験を有しており、その実務経験を活用して授業を行う。

**備考**

この集中講義は、3名の教員によってオムニバス方式で行う。  
後期の集中講義の期間に、3日間で行う。3名の教員が、1日ずつ担当する。短期間のため、レポートや試験は講義内で実施する。評価方法は教員によって異なるため、3日間すべて、必ず出席すること。欠席しないように体調管理に気を付けること。